

一九九二年十一月三十日
集刊東洋学 第六十八号 別刷

杜牧生卒年論拠考

——許渾らの没年にも触れて——

植
木
久
行

杜牧生卒年論拠考

——許渾らの没年にも触れて——

植 木 久 行

(一)

本稿は、筆者の意図する「唐代作家新疑録」作成の一環として、晩唐の著名な詩人、杜牧をとりあげ、その生卒年の論拠を考察する。そして、今日もなお揺れ動くその没年に対する諸説を整理・検討する過程のなかで、許渾や張祐・趙嘏らの没年問題に対しても若干言及したい。

杜牧の生年については、倉石武四郎「杜樊川年譜」⁽¹⁾が、すでに三つの論拠をあげて、徳宗の貞元十九年癸未（八〇三）生まれであることを確定した。いま、それを参照しつつ補足して述べたい。

(1) 杜牧の「上池州李使君書」⁽²⁾（卷十三）の冒頭に、「景業足下、僕与足下齒同而道不同」とある。池州の李使君とは池州刺史の李方玄、景業はその字である。これによれば、杜牧と李方玄は同年齢である。その李方玄については、杜

牧の手になる「唐故処州刺史李君墓誌銘并序」⁽³⁾（卷八）のなかに、「会昌五年四月某日、卒于宣城客舍。年四十三」とある。つまり、杜牧も会昌五年（八四五）当時、四十三歳であつたはずである。

(2) 杜牧は、弟の失明による医療費の支払いなどを名目に、宰相に対して、京官に較べて俸禄のよい地方官への転任を願ひ出た。その「上宰相求湖州、第二啓」⁽⁴⁾（卷十六）には、「是以去歲閏十一月十四日、輒献長啓、乞守錢塘。（中略）某今生四十八矣」とある。杜牧は、まず錢塘（杭州）の刺史を願ひ出て許されず、今度は湖州刺史への就任を希望した。某は杜牧の自称。『資治通鑑』卷二四八、唐紀によれば、大中三年に閏十一月があり、その翌年、大中四年（八五〇）当時、杜牧は四十八歳であつたことになる。平岡武夫『唐代の暦』によつて調査してみても、元和・大和・会昌・大中の各年間に、閏十一月のある年は大中三年しかない。

(3)弟の杜顥に対する、杜牧自身の「唐故淮南支使・試大理評事、兼監察御史 杜君墓誌銘」(卷九)に、「(大中)六年二月八日、歸葬先塋、実(京兆府)万年県洪原郷少陵西南二里。某今年五十」とある。自称の「某」字は、『文苑英華』卷九五八などには「牧」に作る。これによれば、杜牧は少くとも大中六年までは生存し、当時、五十歳であった。

この(1)(2)(3)の論拠によって生年を逆算すれば、いずれの場合でも、杜牧が徳宗の貞元十九年(八〇三)生まれとなり、全く矛盾はない。ただ(1)の「処州刺史李君墓誌銘」のみは、明刊本『文苑英華』卷九五四には、

会易四集作五年四月某日、卒于宣城客舍、年四十七集作三

とあり、論拠となる数字に異同がある。しかし、(2)と(3)の二つだけでも充分、杜牧の生年を確定できることからすれば、これは明らかに、南宋の周必大・彭叔夏らの手になる校注所引「別集」の文字を正しいとすべきであろう。『全唐文』卷七五五も、明刊本『文苑英華』の文字に従わない。

ところで、貞元十九年生年説の、かつての論拠には、資料的にやや問題があった。清の錢大昕『疑年録』卷一には、『唐詩紀事』卷六五、杜荀鶴の条に見える、

牧之、会昌末、自齊安移守秋浦、時年四十四。所謂「使君四十四、兩佩左銅魚」⁽³⁾者也。

によって、会昌年間の末年、すなわち会昌六年(八四六)当

時、杜牧は四十四歳であるとして、生年を逆算した。引用の二句は、杜牧の「春末題池州弄水亭」詩(卷三)の一節であり、「使君⁽⁴⁾は今や四十四歳、黃州と池州と、二度までも刺史に就任することができた」感慨を歌う。齊安とは黃州の郡名、秋浦は池州の治所をいう。杜牧が黃州刺史から池州刺史へと転任したのは会昌四年の九月であり、前掲の詩は、それから約一年半後の会昌六年の晩春、秋浦での作。

そしてその年の秋九月には陸州刺史へと転任する。会昌年間⁽⁵⁾はあわせて六年、したがって「会昌の末」という表現は、その五年をも含むうる不明瞭な方である。しかも、「齊安より移りて秋浦に守たり。時に年四十四」の部分だけを讀むならば、黃州刺史から池州刺史へ転任した当時の年齢が四十四歳であった、と捉えるほうが、むしろ自然であろう。しかし、その転任時は会昌四年であって、六年ではない。こうしたあいまいさをかかえながらも、杜牧が会昌年間の末(六年)にたまたま四十四歳であったために、大きな誤解を生むことが避けられたのである。この意味で、倉石「年譜」が、杜牧自身の文章による確かな論拠を三つあげて貞元十九年生年説を確定したことの意義は、決して過小評価されるべきではない。

ちなみに、杜牧の詳細な他の年譜、張再富の「杜牧之年譜」⁽⁵⁾や繆鉞の『杜牧年譜』⁽⁶⁾などにおいても、この三証以外

の新たな論拠は追加されていない。⁽⁷⁾

(二)

杜牧の没年については、今日もなお定説がない。これは主として、その没年の論拠となる基礎資料が、夢微や占星術による死の予言に満ちた杜牧の伝奇的な「自撰墓誌銘」(巻十)であること、および、杜牧の死後ほどなく編纂され、他人の作品の誤入する余地のほとんど考えにくい裴延翰編『樊川文集』に収める一群の制誥の作成年代を、『旧唐書』宣宗紀の記事などと照らしあわせて丹念に検討していくと、「自撰墓誌銘」等によって推定される大中六年(八五二)、五十歳以後の作と思われる文章が次々と散見することである。しかも「自撰墓誌」は、他人の作成する通常の墓誌ほどの客観性を帯びてはおらず、死亡の日日も空白のままであって、「自撰墓誌銘」を書いた後、杜牧がどれほど生存していたかどうかは確認できない状況である。ただ後引の『旧唐書』本伝などには、「その年、疾を以て安仁里に終る」と明記されている。しかし、この記述もじつは特別な確証があつてのことではなくて、死を予感して書いた以上、その年に没したと臆測したのではないか、という疑いが自然に生じてくるわけである。いいかえれば、死を予感して書いたものの、実際にはやや持ちなおしてもう少し

長く生きた可能性が全く想定されないわけではない。

こうした臆測が成立するのは、裴延翰の「樊川文集の(後)序」⁽⁸⁾のなかにも、杜牧の死そのものには言及せず、死没したとされる大中六年の冬、中書舎人に転任したあとの状況を、「始めて少しく恙を得たり」とのみ記して、その冬の短い期間内に急死したような筆づかいにはなっていないことにも由来する。こうして杜牧の没年は、現在もお、大中六年没、翌年の大中七年没説をはじめとして、大中十年以降の死亡説までも生じてきた。近年(一九八八年)に発表された羅時進「杜牧『自撰墓誌銘』探微——兼論作者卒年問題」⁽⁹⁾では、杜牧は大中年間末(最後の大中十三年は八五九年)に没したとする。これによれば、倉石「年譜」や繆鉞「年譜」などの主張する大中六年没説よりも、六、七年も長く生存していたことになる。もちろん、これらに対する反論も一、二、すでに提出されている。本稿では、大中六年没説の論拠をまず確認したうえで、それ以降、大中年間の末年に至るまでの諸説を一括してとりあげ、その論拠を検討しつつ、その問題点を探ってみたい。

(三)

杜牧の大中六年(八五二)没説の論拠は、以下のごとくである。

(イ)杜牧の「自撰墓誌銘」には、

去歲七月十日、在興興、夢人告曰、「爾当作小行郎」。復問其次、曰、「札部考功、為小行矣」。言其終典耳。今歲九月十九日晡、夜困、亥初就枕寢、得被勢久、酣而不夢、有人朗告曰、「爾改名畢」。十月二日、奴順來言、「炊將熟甑裂」。予曰、「皆不祥也」。十一月十日、夢書片紙、「皎皎白駒、在彼空谷」、傍有人曰、「空谷、非也。過隙也」。予生於角星、昂畢於角為第八宮、曰病厄宮、亦曰八殺宮、土星在焉、火星繼⁽¹⁰⁾來。星工楊晞曰、「木在張、於角為第十一福德宮、木為福德大君子、救於其旁、無虞也」。予曰、「自湖守不周歲、遷舍人、木還福於角足矣、土火還死於角、宜哉。復自視其形、視流而疾、鼻折山根。年五十、斯寿矣」。某月某日、終於安仁里。

云々とある。大中五年、湖州(興興郡)の刺史在任中、やがて考功郎中へと転任するころの七月十日、自分の終典(最終官)を暗示する不吉な夢を見る。それから約一年二か月後の、大中六年九月以降、三回にわたる頻繁な凶兆——畢(終、尽の意)への改名、炊飯途中の甑が裂ける、白駒過隙の語に暗示される死の宣告の凶夢——に次々と襲われ、自らの死を予感して作ったものである。特に杜牧自ら「年五十、斯⁽¹¹⁾寿(命)なり」と述べた部分は注目に値する。

ただ後半の部分は、占星術や観相術特有の難解な語に満ちる。杜牧の場合、誕生時に東方の地平線上に現われた角

宿を、西方のホロスコープ占星術のいわゆる十二宮のうちの、自分の運命や寿命をつかさどる命宮と見なして死を予感したらしい。幸いにも荒井健『杜牧』のなかに、この条に対する詳細な解説があり、頗る有益である。⁽¹²⁾終りの「視流而疾、鼻折山根」の一節は、単なる極度の肝積にすぎぬとする説(前掲の羅時進の論文)もあるが、少くとも方術に詳しい杜牧自身にとっては、不吉な死相のごとく感じられたのである。そうした精神的な衝撃は、杜牧の健康を著しく害したに違いない。

以下の論拠は、いずれも杜牧のこの「自撰墓誌銘」を踏まえており、それを死の直前の辞世の作と見なす立場である。

(ロ)『旧唐書』卷一四七、杜佑伝に付す杜牧伝には、

將及知命、得病、自為墓誌・祭文。又嘗夢人告曰、「爾改名畢」。踰月、奴自家來、告曰、「炊將熟而甑裂」。牧曰、「皆不祥也」。俄又夢書行紙曰、「皎皎白駒、存彼空谷」。寤寢而歎曰、「此過隙。吾生於角、微還於角、為第八宮、吾之甚厄矣。予自湖守遷舍人、木還角、足矣」。其年、以疾終於安仁里。年五十。

とある。すでに(イ)にも見えた安仁里は、都長安城内の坊名。杜牧自身は、四十八歳のとき、すでに耳が遠くなり、齒が抜け落ち、まるで死を目前にした七、八十歳の人のようだ。

肉体は衰え、精神的にも索漠として、「真に老人の態なり」(前掲の「上宰相求湖州、第二啓」と述懐している。

(イ)『新唐書』卷一六六、杜佑の付伝に、

卒、年五十。初、牧夢人告曰、「爾応名畢」。復夢書「皎皎白駒」字、或曰、「過隙也」。俄而炊甑裂、牧曰、「不祥也」。乃自為墓誌、悉取所為文章焚之。

とある。

(二)五代・南唐の劉崇遠が、唐の大中年間以降の雜事を記した『金華子(雜編)』卷上にも、

杜紫薇牧、位終中書舍人。自作墓誌云、「(中略)又夢書片紙『皎皎白駒、在彼空谷』。傍有人曰、『非空也。過隙也』。逾月而卒。

とある。紫薇は、杜牧の最終官である中書舍人の代称。

以上の四証のうち、(ロ)の『旧唐書』本伝は、自撰墓誌を書いた大中六年、五十歳の「其の年」に病死したとし、『太平御覧』卷四〇〇、凶夢の条に引く『唐書』にも、「其年以疾終」とある。また(イ)の『新唐書』本伝も、享年を五十歳とする以上、生年は貞元十九年であるので、同じく大中六年没説である。最後の(二)は、大中六年十一月十日の最終の凶夢から「月を逾えて卒す」という。杜牧の死を大中六年の十二月とする立場である。『金華子』そのものは、確かに道聴塗説のいわゆる小説の範疇に属する書物ではあるが、

その記事は新旧『唐書』の本伝(ロ)の大中六年没説とも矛盾しておらず、この意味で注目値する。ただこの「逾月而卒」の部分は、南宋の曾慥撰『類説』卷二五や、南宋の委心子撰『新編分門古今類事』卷六に引く『金華子』の逸文には、それぞれ「未幾而卒」「未幾果卒」に作る。⁽¹³⁾この場合でも、大中六年没説とは矛盾せず、その十一月の末から十二月中に没したことになる。

さらにもう一つ、新しい資料を加えれば、『冊府元龜』卷八九三、総録部、夢徴二の条に、

杜牧為中書舍人、得病。嘗夢告曰、「爾改名畢」。又夢書片紙曰、「皎皎白駒、在彼空谷」。寤而嘆曰、「此過隙也」。其年以疾終。

とあり、中華書局影印『宋本冊府元龜』を見ても、文字に異同はない。ここにも、(ロ)の『旧唐書』本伝と同じく、「其の年、疾を以て終る」とあり、大中六年没説を補強することになる。

なお、裴延翰の「樊川文集序」には、

明年冬、遷中書舍人。始少得恙、尽搜文章、閱千百紙、擲焚之、纔屬留者十三。

とある。明年とは大中六年を指す。羅時進の前掲論文「杜牧『自撰墓誌銘』探微」は、「始めて少しく恙を得たり」の部分、大中六年に急死したのではないことを表すのだと

いう⁽¹⁴⁾。つまり、頻繁な凶兆に襲われた大中六年の秋冬期に、杜牧が不治の病にかかったとするならば、必ず編者裴延翰の説明があつてしかるべきである。これは、「終典」と予言された考功郎中から中書舍人へと転任したときの、死に対する憂慮と恐怖心から、軽い病気を致命傷のごとく思いこんだにすぎぬ、とする。しかし、この「始少得恙」の句は、必ずしも大中六年の冬没説とは矛盾しない。というのは、この「始」の字は、状態や動作の開始、もしくはそれが發生してまもないことを表す用法であろう。つまり、いささか病氣にかかったばかりの、いいかえれば、まだ意識のしっかりとしていた時に、死を予感した杜牧が自分の作品を自ら取捨選択して焼き棄てた行為をいう。したがつてこの部分は、杜牧が死の直前に作品の大半を焼却したと伝えられながら、なぜ裴延翰自身の編纂する杜牧の別集のなかに、かくも多くの作品が収められたのか、その資料源をはっきりと説明することを通して、この別集が充分信頼を置くに値する杜牧の作品集であることを訴えようとする、そうした文脈のなかで考えるべきであろう。

ちなみに、繆鉞『杜牧年譜』では、杜牧の病死を大中六年の「十一月」とする。おそらく杜牧の自撰墓誌銘を死の直前の作と捉えた結果であろう。これは、『金華子』の逸文とは合致するが、前掲の清の周広業校注本⁽¹⁵⁾『讀画齋叢書』の「月

を逾えて卒す」とは矛盾する。後述するごとく、現時点では十二月ごろの没と考えておくべきであろう。また、最後の凶夢のわずか八日後にあたる大中六年十一月十八日は、すでに西暦(ユリウス暦)八五三年の元旦に相当する。したがつて杜牧の死は八五三年としてもよいわけではあるが⁽¹⁶⁾、無用の混乱を避けて慣例に従い、八五二年のままにしておくべきであろう。詳しくは、呉在慶「杜牧卒年再考」⁽¹⁷⁾参照。

(四)

こうした大中六年没説に対しては、早くから異論があつた。その主なものは、次のごとくである。

(a) 岑仲勉「李德裕会昌伐叛集編証上」⁽¹⁸⁾……後掲の論拠(1)

(2) によって大中七年、五十一歳没。

(b) 余嘉錫「疑年録稽疑」⁽¹⁹⁾……(1)(2)(3)によって大中十年以後没。

(c) 王達津「杜牧『杜秋娘』詩和杜牧的卒年」⁽²⁰⁾(3)(4)などによって大中十一年、五十五歳没。

(d) 羅時進「杜牧『自撰墓誌銘』探微——兼論作者卒年問題——」

……(1)(4)(5)(6)などによって大中年間の末(最後は大中十三年)没。

この四論文は、いずれも主として『樊川文集』巻十七から巻二十に収める官人の辞令書「制」の作成年代を、『旧唐書』宣宗紀等の記載と丹念に照らしあわせることによつ

て、杜牧は大中七年以降も生存していた、とする。その一人、余嘉錫はいう、「蓋し墓銘は即ち大中六年、恙^{やま}有るの時に撰す。その後、病癒ゆるも、未だ追改に及ばず。その集に至りては、則ち牧之の身後に編まる。故に大中七年以後の作有り」と。いま、上掲の四論文のなかで提示された論拠をまとめると、次のごとくである。

(1) 「帰融冊贈左僕射制」(卷十七)……『旧唐書』卷十八下、宣宗紀、大中七年正月壬申(一日)の条に「帰融卒、贈右僕射」とあり、『新唐書』卷一六四、帰崇敬伝に付す帰融伝にも、「大中七年卒、贈尚書左僕射」とある。

(2) 「崔瑛除刑部尚書、蘇滌除左丞、崔璵除兵部侍郎等制」(卷十七)……『旧唐書』宣宗紀、大中七年七月の条に、「以正議大夫・尚書左丞・上柱国・賜紫金魚袋崔瑛為刑部尚書、以銀青光祿大夫・行兵部侍郎・知制誥・充翰林學士蘇滌為尚書左丞、權知戸部侍郎崔璵可權知兵部侍郎」とある。また『旧唐書』卷一七七、崔珙伝に付す崔瑛伝にも「(大中)七年、入為左丞、再遷刑部尚書」とあり、同書同卷の崔璵伝にも「(大中)七年、權知戸部侍郎、(中略)転兵部侍郎」とある。

(3) 「李訥除浙東觀察使兼御史大夫制」(卷十八)……『旧唐書』宣宗紀、大中十年正月の条に、「以(中略)李訥檢校左散騎常侍、兼越州刺史・御史大夫・浙江東道都團練觀察

等使」とある。

(4) 「盧搏除廬州刺史制」(卷十八)……『旧唐書』宣宗紀、大中十年四月の条に、「以刑部郎中盧搏為廬州刺史」とある。

(5) 「令狐定贈礼部尚書制」(卷十七)……『旧唐書』宣宗紀、大中十年の終りに、「桂管觀察使令狐定卒、贈礼部尚書」とある。

(6) 「鄭液除通州刺史、李蒙除陳州刺史等制」(卷十八)……『旧唐書』宣宗紀、大中十二年の条に、「春正月、以晋陽令鄭液為通州刺史」とある。

このほか、王達津の論文(c)では、杜牧の「張直方授左驍衛將軍制」(卷十九)を、『旧唐書』宣宗紀、大中十一年七月の条の「責授邠州員外司馬張直方為右驍衛大將軍」にあたとする。しかしこれは、制書の内容から、明らかに『資治通鑑』卷二四九、大中五年の終りに記される「右羽林統軍張直方、坐出獵累日、不還宿衛、貶左驍衛將軍」にあたるものであり、論拠としての価値は全くない²¹⁾。

杜牧の別集『樊川文集』は、裴延翰の序文に「二十編・四百五十首」とあって、現行の形態とほぼ合致しており、他人の作品が誤入している可能性はほとんどなさそうである。とすれば、『旧唐書』宣宗紀の記事に拠るかぎり、杜牧は少くとも大中十二年の春までは生存していたことになる。

しかもそれが、いわゆる「擬制」⁽²²⁾でないとするれば、中書舍人に在職したままで、「自撰墓誌銘」を執筆した大中六年よりもさらに六年間以上も生存していたことになる。杜牧ほどの盛名ある人物が、他の資料にその生存の痕跡を全くとどめずに、六年間も生きのびることが果たしてありうるであろうか。一、二年ならまだしも、大中十年以降の生存を示す(3)(4)(5)(6)の唯一の論拠、『旧唐書』宣宗紀の記載は、ほんとうに信頼しうるのか、という疑いが自然に生じてくる。

しかも、すでに清の趙翼『廿二史劄記』卷十六の「旧唐書源委」や「唐実録国史凡両次散失」の条などに指摘されているように、『旧唐書』宣宗紀以後は、唐朝の勢威も衰えて日常の記録が整わず、信憑性の高い編年体の実録や紀伝体の国史が存在せず、五代の時期に集めた種々雑多な史料や伝聞をもとに書かれたとされる場合には、なおさらのこと疑わしくなる。錢大昕『廿二史考異』卷五七、旧唐書一にもいう、「宣(宗)・懿(宗)より後は、既に実録の稽ふべき無く、史官の采訪、意は多きを求むるに在り。故に巻帙滋繁^{きずは}くして、事迹の矛盾は益々甚だしきなり」と。しかしだからといって、『旧唐書』宣宗紀の記述は全て誤りだ、と一蹴してしまうわけにもいくまい。

ここでは、まず上掲の論拠のうち、すでに誤りだと指摘

されたものを確認しておきたい。(3)の李訥の制については、すでに繆鉞『杜牧卒年考』のなかで、吳廷燮『唐方鎮年表』を参照して、李訥が浙東觀察使に就任したのは、大中十年ではなく大中六年八月であることを考証する。さらに新しい論拠を加えれば、宋の孔延之編『会稽掇英総集』卷十八、唐大守題名記の条にも、李訥は「大中六年八月、自華州防禦使授」とあって、『旧唐書』宣宗紀の誤りは明白である。この(3)を論拠とするのは、余嘉錫と王達津の二人である。繆鉞の「杜牧卒年考」は、すでに中華書局上海編輯所一九六二年重印、馮集梧『樊川詩集注』のなかに付載されていた。余嘉錫の場合とはかくも、王達津がこれを見すごしたのは、明らかに軽率であろう。

また、(5)の「令狐定贈礼部尚書制」については、吳廷燮『唐方鎮年表』卷七、桂管の条、およびその「考証」下によれば、令狐定は大中三年から六年まで桂管觀察使に在任したとし、『旧唐書』宣宗紀に記される死亡年(大中十年)には、令狐定ではなく張固が在任していた、とする。郁賢皓『唐刺史考』卷二七五、桂州の条も、『唐方鎮年表』の説に従う。その死は大中六年ごろとしてよいが、若干資料不足である。

(6)の「鄭液除通州刺史、李蒙除陳州刺史等制」の場合を考えてみよう。『唐方鎮年表』卷七や『唐刺史考』卷二九〇

によれば、李蒙は大中十二年から咸通二年の死に到るまで邕管経略使・邕州刺史に在任したとし、この制書が大中十二年当時執筆されたとは考えにくい。ただこの場合は、(5)よりも資料が一層不足しており、不確定の要素が多い。

大中十年の盧摶に関する制書(4)の場合は、その可否を考える資料が全くない。結局のところ、上掲の論拠のうち(4)や(6)などは、他の資料から間接的にその信憑性を検討せざるをえない。

(五)

「自撰墓誌銘」を書いた翌年の大中七年の論拠(1)と(2)の場合はともかく、大中十年や大中十二年以後の没を示す(4)(5)(6)を明確に否定しうる資料はないのであろうか。いま、二つの論拠をあげてその可否を考えてみたい。皮日休の「傷進士巖子重詩」⁽²³⁾の序に、

余為童在郷校時、簡上抄杜舍人牧之集、見有与進士巖憚詩。

云々とある。この詩は、皮日休と陸龜蒙の二人の作品を中心とする唱和詩集『松陵集』巻八に収められ、咸通十一年(八七〇)の作と推定できる。⁽²⁴⁾『全唐詩』巻六一四の、同詩に対する注にも「咸通十一年也」とあって疑いない。上掲の序文によれば、皮日休は幼少年時代、郷校で杜牧の作品集を抄録したという。「童」とは、一般に八歳以上、十九歳

以下をいう言葉⁽²⁵⁾である。皮日休の生年にはまだ定説はないが、沈開生「皮日休系年考弁」⁽²⁶⁾は、皮日休自身の詩と文に拠って会昌元年(八四二)生まれと推測する。穩当な説であろう。ただ蕭滌非の「八三四―八三八」生年説も広く知られており、いちおう考慮しておきたい。皮日休のこの詩序は、繆鉞「杜牧伝」⁽²⁸⁾一二九頁以下に指摘されるごとく、裴延翰編『樊川文集』の流伝を最も早く伝える資料であろう。「童」は、十九歳以下ならば、いちおう可能な表現であるとはいえ、常用されるその上限は十六、七歳ごろと考えてよいだろう。会昌元年生まれとすれば、その十六、七歳のころとは、大中十、十一年ごろである。したがって、皮日休が杜牧の作品集を目撃したのは、それ以前のことと考えてよい。

ところで、裴延翰編『樊川文集』は、その序に「雖晦顯而不相解」云々とあって、杜牧の死後に編まれたことは明らかである。しかも同序にはさらに、「小子既就其集、寐寤思慮、顛倒反覆、不翅逾年」とあり、編纂完了からさらに慎重を期して一年以上検討をかさねて、ようやく完成したことがわかる。つまり、杜牧の死後、少くとも一年半以上、二、三年間かけて完成したわけである。⁽²⁹⁾そして、裴延翰の官銜「京兆府藍田県尉、充集賢殿校理」(序文)に拠って都長安付近で編纂されたとすれば、それが皮日休のいた復州

竟陵県⁽³⁰⁾(湖北省天門県)の郷校へと流伝するには、それなりの時間が必要となろう。つまり、皮日休は少くとも杜牧の死後二年以上過ぎたのちに、『樊川文集』の伝抄本を目睹したと考えてよい。

前掲の制書の論拠のうち、大中十年以降の杜牧の生存を示す(4)(5)(6)の場合を考えてみよう。大中十年の(4)(5)の場合ならば、皮日休の抄録は大中十二年以降、大中十二年の(6)の場合ならば、皮日休の抄録は大中十四年以降、とほぼ考えられよう。(6)の場合は、すでに述べた皮日休が童として抄録しうる範囲(大中十、十一年以前)をはずれており、明らかに『旧唐書』宣宗紀の記載は誤りだと考えられる。また大中十年の場合(4)(5)も、皮日休の抄録は大中十二年以降と考えられ、その可能性は乏しい。皮日休の詩序の「童」がもし十四、五歳以下を意味していたならば、その不可能はより一層明白である。

ちなみに、蕭滌非の「八三四〜八三八」生年説の場合を見てみよう。八三四年の場合の上限、十九歳は八五二年(大中六年)、八三八年の場合のそれは八五六年(大中十年)である。死後約二年間以上の編纂・流伝期間を考慮すれば、皮日休の抄録は大中四年から大中八年以前となり、大中十年以降の杜牧の生存を示す『旧唐書』宣宗紀の論拠(4)(5)(6)は、この意味から全く成立しがたいことがわかる。

ただこの詩序によっても、大中七年の生存を示す論拠(1)と(2)(岑仲勉の説)は、通説の大中六年末没説とともに成立して、その当否を判断することはできない。

(六)

もう一つ、杜牧の卒年を探る、より直接的な資料がある。それは、晩唐の顧陶が大和元年(八二七)の初頭から三十年の歳月をかけて編纂した大部の総集『唐詩類選』⁽³²⁾二十巻に付した序文である。その序文には、「大中景子⁽³³⁾(丙子、十年)之歳也」と明記した前序「唐詩類選序」と、そうした日付けを欠く後序「唐詩類選後序」の二つが残っている⁽³⁴⁾。そしてその「後序」には、

近則杜舍人牧・許鄂⁽³⁵⁾(鄂の形訛)州渾、洎張祐・趙嘏・顧非熊数公、並有詩句、播在人口、身没纔二三年、亦正集未得絶筆之文。

とある。これによれば、晩唐の詩人として特に著名な許渾・張祐・趙嘏らは、杜牧とともに後序執筆時よりも二、三年前にあい次いで没したばかりであることがわかる。同時代の、しかも『唐詩類選』の編纂を企てるほど、詩人たちの動向に注意していた人物の発言であるだけに、その資料的価値は特に高いといえよう。

ただこの場合、後序の執筆が前序の大中十年(八五六)と

ほぼ同じ時期かどうか、という点がまず確認されておかなければならぬ。南宋の呉曾撰『能改齋漫錄』卷三、妓人出家詩の条には、

唐顧陶大中丙子編『唐詩類選』。

とあり、同書卷十一、杜子美集無遺憂の条にも、

余家有唐顧陶大中丙子歲所編『唐詩類選』。

云々とある。後序も大中十年の編纂時の執筆と考えておくのが自然であろう。

ところが、前掲の羅時進「杜牧『自撰墓誌銘』探微」は、前序と後序の間には大きな時間的な隔たりがあるとす。その主な論拠は、要するに、編者の顧陶は後序中で自分の年齢を「七十有四」と記している。後序が仮りに前序と同じく大中十年の作ならば、進士科に及第した会昌四年（八四四）当時、顧陶は六十二歳である。たとえ「三十老明經、五十少進士」の語が当時すでにあったとしても、実際には六十歳を越えて合格した人は見ない。咸通二、三年（八六一、二）以後の作、と推定した。しかし、『登科記考』卷二四、光化四年の条の、七十三歳の王希羽ら高齢者が一挙に五人も及第した、いわゆる五老榜の有名な事例をもちだすまでもなく、六十歳以上の人が進士科に及第することは全くありえないことではない。その説は説得力をもたないといえよう。

後序の作成年代に関しては、呉在慶「張祐卒年考弁」⁽³⁵⁾の説が、きわめて注目に値する。それによれば、前序のなかで『唐詩類選』の選録範囲を述べた「始自有唐、至于近歿、凡一千二百三十二首、分為二十卷」と、後序中の、

唯歙州敬方才力周備、興比之間、独与前輩相近。亡歿、雖近、家集已成三百首、中間錄律韻八篇而已。雖前後復接（絶？）、或畏多言、而典型具存、非敢遺棄。

とある部分に着目し、前序の「近歿」の人とは、後序で特にその採録を説明する「亡歿雖近」の李敬方その人であり、両序の作成時期はきわめて近いという。⁽³⁶⁾この説は妥当であろう。しかも後序中には、前序中の「終恨見之不徧」や「無慮選之不公」の言葉を特に引用し、選録の範囲や基準に関する問題点を丁寧に説きあかそうとする。いいかえれば、前序は、まず儒家的な比興諷諫精神を尊ぶ文学観から詩の意義や功用を説いた後、詩歌の歴史を概観し、特に杜甫や李白を中心とする唐代のすぐれた詩人たちに対する自己の選録基準や分類編目の体例を述べており、作品選集の序文にふさわしいものになっている。他方、後序は、三十年間、編纂に没頭するうちに、はや七十四歳の老齢になった感慨を述べながらも、宋の姚寬『西溪叢語』巻上に、

顧陶為『唐詩類選』、如元・白・劉・柳・杜牧・李賀・張祐・趙嘏皆不収。

と指摘される、中晩唐期における著名な詩人たちの作品を収録しなかった事情を特に述べて、読者の理解を得ようとする。つまり、前序と後序は、明らかに緊密な意図の照応のもとに短時日の間に執筆された、ほぼ同時期の作と考えてよい。この意味で、『唐才子伝校箋』巻七、李敬方(梁超然執筆)の条に、

「後序」写於編定之時、亦係大中十年所撰。

という推測は肯定されてよい。⁽³⁷⁾

さらに傍証をあげよう。陸龜蒙に「和過張祜處士丹陽故居」詩(『全唐詩』巻六二六)がある。この詩は、張祜の死後、丹陽の隱宅を訪れた顔萱が、人手にわたった故居や遺族の生活苦を見て作った詩に唱和したものであり、陸龜蒙の作に唱和した皮日休の詩も伝わる。陸龜蒙の詩の序には、張祜の死後のことを、

不蓄善田利產為身後計。死未二十年、而故姬遺孕、凍餒不暇。

云々という。ところで陸龜蒙の詩は、皮日休や顔萱の詩とともに『松陵集』巻九に収められており、その詩が咸通十年の冬末から咸通十二年の初春に至る期間、いいかえれば、咸通十一年(八七〇)を中心とする一年あまりの期間に作られたことがわかる。つまり、張祜の死は、それから「未だ二十年ならざる」以前、咸通十一年の作とすれば、その十

九年前は八五一年(大中五年)、そしてその下限と思われる十六年前は八五四年(大中八年)であり、張祜の死はほぼその間であると考えてよい。たとえ咸通十二年作の場合でも、その死は大中九年以前、咸通十年作の場合は大中七年以前となる。その張祜の死から二、三年後に作られた「後序」の作成時期は、遅くとも大中十一年(八五七)ごろ以前となる。かくて、羅時進の説のごとく、決して咸通二、三年(八六一―二)以後に作られたものではないことがわかる。要するに、顧陶の「後序」は、ほぼ前序と同じ大中十年の作と考えるべきであろう。

しかも「後序」では、近歿の李敬方を、二、三年前に没した杜牧・許渾・張祜・趙嘏らと明確に区別して論じている。李敬方は、宋の羅願『新安志』巻九、叙牧守の条によれば、大中四年から六年に到る間、歙州刺史であったとする⁽³⁸⁾。唐代では故人を呼ぶ場合、その最終、もしくは最高の官を付して呼ぶのが通例である。とすれば、後序の「歙州敬方」という表現は、歙州刺史が李敬方の最終官であり、離任後ほどなく没したことを示唆する。「湯泉銘」(『全唐文』巻七三九)によれば、李敬方は少くとも大中六年十一月までは生存していた。後序作成の年と推測される大中十年は、その三年あまり後にあたる。この意味からも、『唐才子伝校箋』巻七、李敬方の条(梁超然執筆)に、その死を大中九年

ごろと推測するのは穏当であろう。周勛初主編『唐詩大辭典』も、八五五（大中九年）？没とする（呉汝 執筆）。

かくて、杜牧の死は、顧陶の「後序」によって、許渾や趙嘏・張祜らとともに、ほぼ大中十年よりも二、三年前の時期、つまり、大中七、八年ごろであることになる。『旧唐書』宣宗紀を唯一の論拠として大中十年以降も生存していたとする前提の(4)(5)(6)は、いずれも成立しがないことが明白である。

(七)

結局、残った問題は、著名な歴史学者岑仲勉が提出した大中七年の正月と七月の作と目される論拠(1)と(2)の信憑性である。大中七年没ならば、むしろ大中六年末没説よりも、この顧陶の「後序」の記載により適切に合致する。もっとも大中六年没説も歳末の十二月ごろ没説であるため、大中十年からは三年少々であり、充分「身没して纔かに二、三年」といえる。

二つの論拠のうち、(2)の「崔瑒除刑部尚書、蘇滌除左丞、崔瑒除兵部侍郎等制」については、その作成年代に若干の疑問がある。唐の開成二年（八三七）に成る丁居晦「重修承旨学士壁記」には、

蘇滌、大中四年十二月二十四日、自右承入。⁽³⁹⁾ 其月十八日、

加知制誥。五年六月五日、遷兵部侍郎・知制誥、並依前充。六年六月九日、上表病免。□年十一月、守本官出院。

とある。他方、蘇滌を尚書左丞に任命する前掲の制書には、

翰林学士承旨・銀青光祿大夫・行尚書兵部侍郎・知制誥……

蘇滌、行冠人倫、爵高天秩。（中略）近以微恙、懇請自便、君子之道、進退可觀。

という。この両者を比較して読めば、大中六年六月九日になされた「上表病免」は、杜牧の制書中の「近以微恙、懇請自便」に相当する。「近ごろ」の語に着目すれば、この尚書左丞就任の辞令は、明らかに大中六年六月九日からあまり遠くない時期、遅くとも年内に出されたことがわかる。

翰林院を出た年については、『翰苑群書』本（百部叢書集成）では空欄であるが、鄧邦述の群碧樓鈔本（岑仲勉の指摘）では「七」に作り、呉廷燮『唐方鎮年表』「考証」下、荆南・蘇滌の条には「六」に作る。この点に関して、岑仲勉「翰林学士壁記注補」⁽⁴⁰⁾ 十一、宣宗の条には、

如謂六年六月已上表告病、延至七年十一月乃允其請、亦未合乎除制「近以微恙」之意。惟是滌除左丞、与崔瑒刑尚、崔瑒兵侍同制、依『旧唐書』一七七、瑒・瑒均以七年除是官、則『旧唐書』紀之作七年、亦未能遽疑其錯簡也。

という。岑仲勉は、上掲の論拠(1)と(2)によって、杜牧は大中七年七月以降に没したとする。そしてその論拠は、すで

に述べたように、(1)の場合は『旧唐書』宣宗紀と『新唐書』
 歸融伝、(2)の場合は『旧唐書』宣宗紀と同書崔瑒・崔瓌伝
 であつて、その論拠はいずれの場合も二つ以上ある。

しかし、『旧唐書』宣宗紀によつた論拠(3)(4)(5)(6)がすべ
 て誤りであり、しかも新旧『唐書』本伝や『冊府元龜』に
 おいて杜牧の死を大中六年と明記する状況下では、「未だ遽
 かにその錯簡を疑ふ能はざる」穩当なる見解も再考の余地
 がある⁽⁴⁾。しかも「重修承旨学士壁記」によれば、蘇滌の
 尚書左丞就任は大中六年である可能性が高いからである。

こう考えてくると、結局、大中七年の生存を表す論拠は、
 ただ(1)のみが残ることになる。ところで歸融の死は、『旧唐
 書』宣宗紀に大中七年正月壬申(一日)とあるが、『新唐書』
 歸融伝には「大中七年卒」とのみあつて、死亡日を記さな
 い。杜牧が大中六年の十二月末まで生きていたとすれば、
 信頼すべき実録や国史をもたない『旧唐書』宣宗紀の記載
 は、大中六年十二月以前の没を、誤つた伝聞や雜記の類に
 もとづいて翌年の正月一日の条に記したのではないかと、と
 も考えられてくる。そして『新唐書』の記載も特に確固と
 した論拠があつて「大中七年卒」としたのではなく、『旧唐
 書』宣宗紀のそれにそのまま従つたのではないかと。

『旧唐書』宣宗紀の制誥授官年月の記載には、予想を越
 えるほど誤りが多い。いま、呉在慶「杜牧卒年及『杜秋娘

詩』系年考弁——兼与王達津教授商榷——」の指摘によれば、

- (イ)「高元裕除吏部尚書制」(卷十七)
- (ロ)「畢誠除刑部侍郎制」(卷十七)
- (ハ)「庾道蔚守起居舍人、李汶濡守礼部員外郎、充翰林学士等
 制」(卷十七)

(ニ)「韋有翼除御史中丞制」(卷十七)

(ホ)「鄭処誨守職方員外郎兼侍御史知雜事制」(卷十七)

の五つの制文は、『旧唐書』宣宗紀によれば、それぞれ大中
 二年七月、同八月、大中三年九月、同十一月、同年同月の
 こととなつて、いずれも杜牧が知制誥、もしくは中書舎人
 在任中(大中五年秋—大中六年)以前の作である。これらの制
 文がいわゆる「擬制」とも考えにくく、また他人の作が誤
 入しているとも考えがたい。このうち、すでに(ハ)は嚴耕望
 『唐僕尚丞郎表』卷九、輯考三上、吏尚、高元裕の条に、
 大中六年の夏の誤りであると考証する。(ロ)の畢誠の場合も、
 同書卷二十、輯考七下、刑侍、畢誠の条に、大中六年七月
 の誤りだと考証する。(ハ)の庾道蔚や李汶濡の場合は、岑仲
 勉「翰林学士壁記注補」十一に、大中六年七月十五日の誤
 りだと考証する。(ニ)の韋有翼に対しては、『唐方鎮年表』考
 証上(陝號)に、大中六年春の誤りだとし、(ホ)の鄭処誨に
 ついては、岑仲勉「翰林学士壁記注補」十一に、大中五、六
 年の誤りだと考証する。

このように考えてくると、「帰融冊贈左僕射制」のみによって、新旧『唐書』や『冊府元龜』などを論拠とする杜牧の大中六年末没説を誤りと断じるには、やはり論拠が不十分であろう。岑仲勉が提示した大中七年没説の論拠(1)と(2)は、現在もおお完全には否定しきれず、杜牧の伝記研究の専家、繆鉞自身も、一時期その説に従ったほど説得力がある。しかし、そのうち、(2)の作成時期に疑問が生じた現在では、やはり宣宗の大中六年壬申(八五二)二月ごろの没と考えておくべきであろう。帰融の死の年月(1)に、誤りがないとは断定しがたいからである。

(八)

ここで、顧陶の「後序」とのかかわりで、趙嘏・張祐・許渾の没年問題についても若干言及しておきたい。すでに述べたように、「後序」によれば、三人の詩人の没年も大中十年の二、三年前、ほぼ大中七、八年ごろと推定される。この観点から現在提出されている諸説の当否を少し検討しておきたい。

まず趙嘏については、譚優学「趙嘏行年考」⁽⁴⁴⁾がほとんど唯一の伝記研究である。それによれば、最も遅く系年しうる確実なものは、大中四年(八五〇)の「上令狐相公」詩であろう。そこに引く『唐音統籤』の注とは、じつは宋の樂

史『広卓異記』巻六を踏まえている。それには「渭南の尉趙嘏、詩を献じて云ふ」云々とあって、趙嘏はすでに最終官、渭南の尉に在任中であつた。さらに譚優学は、「訪沈舍人不遇」詩の沈舍人を中書舍人沈詢を指すとし、沈詢が大中九年、礼部侍郎から浙東觀察使として赴任する前の、ほぼ大中六年の作と臆測する。当時、趙嘏は渭南尉であり、それで「溪翁」と自称したので、とする。この臆説は、大中六年の作と推定される杜牧の「秋晚与沈十七舍人期遊樊川不至」詩(卷二)の「沈十七舍人」が、この沈詢であると考えられることと関連して興味深い。ただ譚優学が、大中七、八年の作ならば、沈詢はすでに礼部侍郎に在任していて「沈舍人」と呼べない、と推測するのは誤りである。唐の趙璘『因話録』巻六、羽部に、「大中九年、沈詢侍郎、以中書舍人知举」とあり、大中九年の春もまだ中書舍人に在任中であつた。嚴耕望『唐僕尚丞郎表』巻十六、輯考五下、礼侍の条によれば、沈詢が正式の礼部侍郎を拝命したのは大中九年であり、その年の九月、浙東觀察使となつて転出した、とする。つまり、「沈舍人」という呼称自体は、少くとも大中九年の春までは可能である。ところで、譚優学は、この詩以後の事跡は未詳とし、「約大中六、七年間」の没とするが、顧陶の「後序」をも参照すれば、大中七、八年ごろと考えてよい。ちなみに、顧陶と趙嘏とは、会昌

四年に進士科に一緒に及第した、いわゆる同年である。

他方、張祐については、譚優学の「張祐行年考」⁽⁴⁷⁾と呉在慶の「張祐卒年考弁」(前掲)などがある。譚優学は、張祐の「喜聞収復河隴」詩は、大中五年の冬十一月(十月の誤り)、張義潮が吐蕃に占領された河隴の地を奪還したこと(『資治通鑑』卷二四九)を聞いて作ったものであり、その消息が江東の丹陽の地に退居する張祐のもとに届いたのは、大中六年の初めと推測する。そして、この詩が確実に系年しうる最後の作品であるとする。ただ蘇瑩輝「試論張義潮収復河隴後遣使獻表長安之年代」⁽⁴⁸⁾によれば、河隴の地十一州の奪回そのものは、大中四年のことである。そしてそれを伝える張義潮の兄、義沢(義潭?)が都長安を訪れた時期については、大中五年の七月(『唐会要』卷七二)、八月(『旧唐書』宣宗紀)などとする異説もある。もともと蘇瑩輝の説によれば、張義潭は七月沙州をたち、十月に都長安に到着・入見したとする。とすれば、譚優学の結論そのものは、あまり改める必要はない。

他方、呉在慶は、張祐の「投宛陵裴尚書二十韻」の詩を大中六年の秋の詩と推定し、『太平広記』卷二三八、張祐の条に引く「桂苑叢談」によって、大中七年の終りか大中八年の初めにはまだ生存していた、とする。この詩は、譚優学が大中三年、裴休が宣歙觀察使在任中の作としたもので

ある。これは、詩題の宛陵が宣歙觀察使の鎮する宣州の地であることによる。呉在慶は、裴休が礼部尚書となったのは大中五年九月のことであり、これ以後始めて「裴尚書」と呼ぶことができた。裴休は当時、諸道塩鉄轉運等使であったため、宛陵(宣歙鎮)に赴くことができたとする。しかし、何汝泉「唐代転運使初探」⁽⁴⁹⁾上篇「三、転運使の治所問題」によれば、令外の官である塩鉄轉運使が省台寺監の京官をもつて充てられたときには、その治所(塩鉄轉運司)は都に置かれるのが通例であるとし、裴休もその例に数えている。とすれば、南宋初めの蜀刻本『張承吉文集』卷十に「裴尚書」に作っていたとしても、後日の書き改めであった可能性が高い。しかも北宋の銭易『南部新書』丁によれば、援助を裴休ではなく、蘇州嘉興県に置かれた塩鉄轉運使配下の、江淮を代表する塩監(塩稅機關)の一つ、嘉興監の長官裴弘慶に求めたことになっており、論拠とする「桂苑叢談」の記事そのものの信憑性に疑いが生じてくる。⁽⁵⁰⁾呉在慶の説の要旨は、『唐才子伝校箋』卷六、張祐の条にもくり返されるが、要するに現時点では、張祐は大中六年の前半ごろまでは生存を確認でき、それ以後は未詳とすべきであろう。したがって張祐の没年も顧陶の「後序」によって、大中七、八年ごろと考えておくべきであろう。

最も問題となるのは、許渾の没年である。許渾の詩のな

かで確実に系年しうる最も遅いものは、大中八年の「譙錢李員外」詩であり、異説はない。ところが譚優学「許渾行年考」⁵¹⁾では、許渾の「江西鄭常侍赴鎮之日有寄、因酬和」詩の鄭常侍を鄭憲に比定し、郢州刺史在任中、大中十一年の作とする。しかしその論拠は必ずしも確定的なものではない。というのは、鄭憲の赴任時期「夏」は、詩中の季節感（施随寒、浪動）と明らかに矛盾するからである。譚優学はさらに、「陵陽春日、寄汝洛旧遊」詩を大中十二年、陸州在任中の作とする。この論拠は、わずかに『全唐詩』卷五三五の詩題に「一作移撰太守」という異文を記す以上、許渾は郢州刺史をへたのち陸州刺史になったのであり、その逆ではない、というにすぎない。しかし、顧陶の「後序」に「許鄂州渾」（鄂は郢の形訛などであるように、郢州刺史を許渾の最終官と見なすほうが自然である。『新唐書』卷六十、芸文志、許渾丁卯集一卷の条にも、「大中（年間）、陸州・郢州二刺史」とある。そしてその論拠の注記「移撰太守」そのものも、最も信頼しうる南宋の蜀刻本（続古逸叢書）『許用晦文集』卷一や景宋鈔本（四部叢刊）『丁卯集』卷上には見えず、その信憑性はほとんどない。

ただ譚優学は、『唐才子伝校箋』卷七、許渾の条では、李丹の説に従って、許渾の「聞辺將劉皋無辜受戮」を大中十二年三月の事件を踏まえたものと見なし、許渾の死をそれ

以後のこととした。これは、『新唐書』卷八、宣宗紀、大中十二年の条に、「三月、塩州監軍使楊玄价、殺其刺史劉皋」とあることにもとづく。劉皋が楊玄价に誣殺されたことは、『新唐書』卷二〇七、宦者伝上、楊復光伝や、裴廷裕「東觀奏記」卷下にも見え、詩の内容からも、本詩がこの事件を指すことは疑いない。ただ年月それ自体は、前掲の『新唐書』宣宗紀にのみ記されているにすぎないが……。

他方、董乃斌「唐詩人許渾生平考索」⁵²⁾も、譚説とほぼ同じく、郢州刺史から陸州刺史へと移り、その在任中、大中十二年に没したと考証するが、結局のところ、大中九年以降も生存していた確証はなさそうである。

要するに、大中九年以降の生存を明示するものは、劉皋の誣殺を聞いて作った前掲の詩であり、それによれば、許渾は大中十二年三月以後に没したことになる。この指摘自体は、すでに唐邦治「唐郢州刺史許渾伝」⁵³⁾に見え、それに付す「許郢州丁卯詩譜序」には「大中十二年、（許）君已に帰老せし時の作」とする。しかし、大中九年以降の事跡に關する確証がほとんどなく、そして何よりも顧陶「後序」の記載からすれば、大中十二年三月以降に没したとする説は頗る疑わしい。下孝萱・喬長阜「許渾」⁵⁴⁾の条に付す「許渾生・卒年考」には、顧陶の「後序」によって、「許渾の卒年也不得晚于大中十年」と述べて「八五五（大中九年）？没」

とし、許渾の「聞辺將劉皋無辜受戮」詩に對しては、

此詩風格怪質、不似許渾作品、恐系誤収。在無其他佐証的情況下、此詩不能作為論定許渾卒年的根拠。

と述べている。穩当な説であろう。ただその死は大中九年ごろではなく、やはり大中七、八年ごろと訂正すべきであろう。そして許渾の「讎錢李員外」詩がほぼ大中八年の作であることを考えれば、現時点では、許渾は郢州刺史在任中、大中八年ごろに没した、と考えておくべきであろう。

(注)

- (1) 『支那学』三卷十一号、一九二五年。
- (2) 杜牧の詩文の巻数は、陳允吉校点『樊川文集』(上海古籍出版社、一九七八年)に拠る。
- (3) 左銅魚は、新任の刺史であることを証明する銅製の魚符(魚形のわりふ)。宋の程大昌『演繁露』巻一参照。
- (4) ただし、この部分は『疑年録』巻一には引かない。
- (5) 『中華学苑』第七期、一九七一年。
- (6) 人民文学出版社、一九八〇年。
- (7) 羅時進の論文によれば、『自撰墓誌銘』の「子生於角」は、作者自ら九月(十九日?)に生まれたことをいうとする。
- (8) この序は本来、『唐文粹』巻九三に従って『樊川文集後序』に作るべきである。削除された部分によれば、本来「叔父の中書公」の「前序」があつたらしい。『全唐文』巻七五九、裴延翰の小伝に「宰相度從子」とするのは、その「中書公」を裴度と考えたためか。しかし、裴延翰は杜牧の姉の夫裴儔の子、字伯甫

のことらしい。繆鉞『杜牧年譜』八七頁参照。

- (9) 『人文雜誌』一九八八年第六期。
- (10) 「来」字は、荒井健『杜牧』による。
- (11) 筑摩書房・中国詩文選、一九七四年。
- (12) 戴内清『中国の天文曆法』(平凡社、一九六九年)も参照。
- (13) 宋の朱勝非撰『紺珠集』巻十所引『金華子』にも、「未幾卒」に作る。
- (14) 岑仲勉『李德裕会昌伐叛集編証上』にもいう、「祇知其始疾約在大中六年之冬、卒於是年否、未得而詳也」と。
- (15) 上海古籍出版社、一九八八年再版。
- (16) 陳尚君『杜牧卒年訂正』(『文学遺產』一九八三年二期)参照。
- (17) 『人文雜誌』一九八三年五期。
- (18) 広州・国立中山大学『史学專刊』第二卷一期、一九三七年。
- (19) 中華書局刊『余嘉錫論学雜著』下冊所収一九四一年の自序あり。
- (20) もと『南開大学学報』一九七九年二期に収める「古詩叢考」の一部。いま、王達津『唐詩叢考』上海古籍出版社、一九八六年による。なお同論文は、さらに裴延翰の序文をも論拠としてあげるが、誤読による曲解である。呉在慶『杜牧卒年及「杜秋娘詩」系年考弁』参照。
- (21) 『李文華除睦州刺史制』(巻十八)も、かつて問題になったことがある。しかし、その左遷は、『唐会要』巻十七、廟災變の条などによれば、大中六年四月のことであつて、問題は全くない。
- (22) 花房英樹『白氏文集校訂余録』(京都府立大学学術報告『人文学報』十八号、一九六六年)や、平岡武夫『杜佑致仕制札記—白居易の習作』(『鈴木博士古稀記念東洋学論叢』一九七二年)など参照。
- (23) 子重は嚴暉の字。『唐才子伝校箋』巻六、杜牧の条(呉企明執筆)参照。

- (24) 沢崎久和『松陵集』の構成と編次―沈開生氏「皮日休系年考弁補正」(福井大学『国語国文学』二六、一九八七年)や、『唐才子伝校箋』巻八、皮日休の条(梁超然執筆)など参照。
- (25) 四川・湖北辞書出版社刊『漢語大典』四、二七一頁など参照。
- (26) 江蘇人民出版社刊『研究生論文選集』(中国古代文学分冊)一九八三年所収。
- (27) 蕭滌非、鄭慶篤整理『皮子文藪』(上海古籍出版社、一九八一年)に付す中華書局上海編輯所一九五九年版の前言。
- (28) 人民文学出版社、一九七七年。
- (29) 呉在慶「杜牧卒年及『杜秋娘詩』系年考弁」は、序文中の「上五年冬」を、作序の年から五年前の冬を意味するとして、裴序は大中九年に書かれたとする。他方、羅時進の論文は、同じ句の「上」を、すでに時代が変わったことを表すとし、咸通年間に書かれた証拠とする。しかし、単に「去る大中五年の冬」の意とも充分に考えられ、二人の説には従わない。
- (30) 沈開生「皮日休系年考弁」や、『唐才子伝校箋』巻八、皮日休の条参照。
- (31) (3)は誤りであるので除く。
- (32) 卞孝萱『顧陶『唐詩類選』は第一部尊杜選本』(同『唐代文史論叢』山西人民出版社、一九八六年)や、呉企明『唐人選唐詩伝流散佚考』(同『唐音質疑録』上海古籍出版社、一九八六年)参照。
- (33) 陳垣『史諱舉例』巻八、唐諱例参照。
- (34) 『文苑英華』巻七一四や、『全唐文』巻七六五所収。
- (35) 『人文雜誌』一九八五年二期。
- (36) 『唐才子伝校箋』巻六、張祐の条(呉在慶執筆)にも見える。
- (37) 卞孝萱の前掲論文「注(32)」が顧陶の生年を七八三と推測するのも、この後序の作成を大中十年とする立場である。
- (38) 湛之「唐代詩人李敬方事迹弁正」(『文学遺産』一九八〇年一期)参照。
- (39) 岑仲勉「補唐代翰林面記」巻下「補文宗至哀帝七朝翰林承旨學士記」(同『郎官石柱題名新考訂(外三種)』上海古籍出版社、一九八四年所収)によれば、この下に「充承旨」を脱する。
- (40) 前注(39)の書物に所収。
- (41) 嚴耕望『唐僕尚丞郎表』巻十二、輯考四下、戸侍、崔瑗の条には、「此制疑非牧行」とし、杜牧の作とする定説を疑う。
- (42) 『廈門大學學報』(哲学社会科学・増刊・文学專号)一九八二年。
- (43) 繆鉞『杜牧詩選』(人民文学出版社、一九五七年)の「前言」参照。
- (44) 同『唐詩人行年考』(四川人民出版社、一九八一年)所収。
- (45) 繆鉞『杜牧年譜』参照。
- (46) 岑仲勉『唐人行第錄』沈十七詢参照。
- (47) 注(44)と同じ。
- (48) 同『敦煌論集続編』(台湾学生書局、一九八三年)所収。
- (49) 西南師範大學出版社、一九八七年。
- (50) 王仲鏞『唐詩紀事校箋』巻五二、張祐の条参照。ちなみに、『南部新書』によれば、救いを求めたのは張祐の子自身のようなのである。
- (51) 同『唐詩人行年考(続編)』巴蜀書社、一九八七年所収。
- (52) 『文史』二六輯、一九八六年。
- (53) 『鎮・丹・金・溧・揚聯合月刊』第二期、一九四六年所収。
- (54) 呂慧鵬ほか『中国歴代著名文学家評伝』(続編1)山東教育出版社、一九八九年所収。